

本田由紀著 「教育の職業的意義－若者、学校、社会をつなぐ－」 ちくま新書、筑摩書房 2009 年 12 月 10 日刊を読む

「柔軟な専門性」 flexpeciality(flexibility 柔軟性＋speciality 専門性)

1. (1) 「教育の職業的意義」を、いかにして構築してゆけばよいのか。それを考える上で、とくに<適応>の側面の内実について、いま少し議論しておかなければならない。
(2) マクロレベルの産業構造や技術の変化が加速していること、メゾレベルの企業の事業内容や組織編制にも変動が常態化していること、そしてそれらに伴って、ミクロレベルでも個人のたどる職業キャリアが過去と比べて不安定性や流動性の度合いが高まっていること、これらの趨勢は否定しがたい。
2. (1) そうした中で「教育の職業的意義」を考えようとするとき、陥りやすいのは、いかなる変化や領域にも対応可能な汎用的・一般的スキルをつけておけばいい、という発想である。
(2) 「キャリア教育」には、まさにそうした考え方が結実している。
(3) 日本のみならず、他の先進諸国や国際機関も、「キー・コンピテンシー」や「ジェネリック・スキル」などの概念を掲げて称揚する向きが見られる。
3. (1) 日本は「戦後日本型循環モデル」が成立した数十年前からすでに、専門領域別の個別具体的知識や技能よりも、「訓練可能性」としての一般的抽象的能力を重視する傾向が強かった。
(2) それに加え、近年は前述のような国際的動向が存在する中で、従来からの傾向を認知的な面から非認定的で人格的・情動的な面―「意欲」や「コミュニケーション能力」など―に拡張する方向で、一般的抽象的能力賛美の傾向にいつそう拍車がかっている。
4. (1) このように、柔軟で汎用性の高い能力が過剰に称揚されることに対しては、あくまで警戒が必要だと、筆者はこれまで主張してきた。
(2) そうした力を備えた人間像を望ましいものとしてどれほど高く掲げようとも、どうすればそのような人間像が育成されうるのか、とくに教育という制度の枠内で具体的にいかなる方法が可能なのかについて、現段階ではほとんど何も明らかになっていない。
5. (1) そして、柔軟で汎用性の高い能力は、個人に対して何らアイデンティティや進路、キャリアについての指針を与えるものではない。
(2) 「いかなる場所でもうまく生きてゆける人間であれ」という要請は、「いったい自分はいかなる場所で生きてゆけばいいのか」という、個人にとってもっとも切実で重要な問題に対して手がかりとはならず、個人は不安と困惑の中に取り残される。
(3) しかも、「いかなる場所で生きてゆくか」をめぐる選択の成功／失敗の責任は、すべて個人に帰されるのである。

6. (1) これらの問題を防ぐためには、論理的に、社会が個人に対して求める人間像の抽象性・汎用性の水準を下げるという方策しかありえない。
- (2) すなわち具体的には、義務教育後の後期中等教育以上の教育段階については、職業と一定の関連性をもつ専門分野に即した具体的な知識と技能の形成に、教育過程の一部を割り当てるという方策である。
7. (1) しかしそこで重要なのは、教育の外部社会の変化や流動性を鑑みるならば、そうした特定の専門分野に関する教育は、過度に狭い範囲に固定的に限定されたものであってはならないということである。
- (2) 特定の専門分野の学習を端緒・入り口・足場として、隣接する分野、より広い分野に応用・発展・展開してゆく可能性を組み込んだ教育過程のデザインが必要である。
8. (1) 筆者は、このような膨らみをもつ専門性を、「柔軟な専門性(flexspeciality)」と呼んでいる。
- (2) EU では、労働市場政策の理念として「柔軟な安定性(flexicurity)」というキーワードが用いられることが多くなっている。英語の flexicurity とは、flexibility(柔軟性)と security(安定性)をつなぎ合わせた造語である。
- (3) これに倣い、flexibility(柔軟性)と speciality(専門性)をつなぎ合わせて筆者が創った言葉が flexspeciality(柔軟な専門性)である。
9. (1) 知識の総体に至るアプローチとして、まず何らかの専門を選択し、そこからまずは関係の深い隣接領域へと徐々に拡張し、さらにより一般性・共通性・普遍性の高い知識の獲得へと進んでゆくというプロセスが有効である。
- (2) 初発の専門性は、個人にとって、「暫定的な輪郭」として機能する。
- (3) それはあくまで「暫定的な」輪郭であり、以後の展開可能性がすでに予期的に組み込まれたものである。
10. (1) このような「柔軟な専門性」は、教育過程編成の際の原理としてのみならず、個々人の職業上の経路の望ましいあり方としても用いることができる。
- (2) 実のところ、「柔軟な専門性」と合致するような職業経路は、現実社会のいたるところにおいて実際に観察される。
- (3) たとえば和食の世界で修業を始めた料理人が洋の要素も取り入れ、さらによりよい素材を入手するために有機農業との関わりを深め、ひいては地域興しの担い手となるといったように。
- (4) あるいは、臨床心理士として困難を抱える若者の支援に取り組むうちに、労働問題や教育問題にまで関心を広げ発言してゆくといったように。
- (5) あるいは、金属溶接の技術を生かして介護装置の開発に取り組み福祉への関与を深めていくといったように。
- (6) いずれも、初発の専門知識を核としつつ、それに関連するさまざまな事柄へと、認識や行動を広げてゆくというプロセスであり、むしろ世の中の動きの全般においてそうしたプロセスこそが常態と言ってもよいだろう。

11. (1) また、「柔軟な専門性」を体現しているような教育も、すでに現実に存在する。
(2) 「身につけた専門性が今後の自分の生涯において支えになる」と考えている生徒ほど、「専門分野以外のことも身につけていきたい」という意欲が高い。
(3) さらに、専門分野の有用性を感じている生徒ほど、普通科目の学習意欲も高く、さらには政治意識や社会変革意識も高い。
(4) 「柔軟な専門性」が、「職業的意義」の高い教育を通じて、すでに実現されている例がある。
12. たとえば看護師として働いている卒業生 S さんは、「高校福祉科を出て看護学校に行ったことのメリットとしては、高校の時と似たような復習部分があったので、意外と勉強に入りやすかった点である。もちろん看護学校の方がそれより詳しくやるのだが、少し介護の勉強が入っていて(たとえば、シーツ交換をしたりするときのやり方はほとんど変わらないので)、「ああ、こういう勉強をされていてよかったな」というのはあった」という。
13. 懐石料理店で働いている T さんは、「福祉科での学びが活かされていると感じるのは、体の不自由な方が来店したときの介助の仕方であり、店長からも相手の目線で会話ができと言われる時がある。先日は常連客の高齢の夫婦が私の誕生日にプレゼントを持って来てくれた。「いつも親切にありがとう」と言われて、感激した。福祉科にいたからお客さんの立場に立って、途中でおしぼりを交換したり、次は何が必要かと考えることができるのではないかと思う」という。T さんは、たまたま知人の紹介で飲食店に勤めることになったが、高校に入学する時から「人に関わる仕事がしたい」と考えて福祉科を選んでおり、その点では一貫しているという気持ちをもっている。今後は調理師や簿記の資格を取得することを考えているという。
14. こうした S さんや T さんの事例に見られるように、一度身につけた専門性は、その後に隣接領域や、一見関連のない領域に移った場合でも、実質的な有効性を発揮しうるのである。社会の現実と同様に、知識や技能も網の目状につながっているのであり、初発の専門性は、その後の展開の種子としての意味をもっているのである。
15. ただし、このような柔軟な展開の種子となりうる専門性を身につけることができていない個人が、日本社会では大きな比率を占めている。そのための有効性を発揮できている教育機関も、ごく一部に限られる。だからこそ、「柔軟な専門性」を通じて個人の社会に対する〈適応〉を導く教育を拡充する必要性を、筆者は主張しているのである。

P191 ~ 198

[コメント]

東京大学の本田由紀先生の主張なされる「柔軟な専門性」、flexibility 柔軟性と speciality 専門性を合わせた flexpeciality の考え方に私も賛成。高校や大学・短期大学・専門学校で学習した体系的な知識や技能を中核として、自分の得意分野、専門分野にそれらを少しずつ活用していくことは、一人ひとりが主体的な生き方、働き方をする上で欠かせないと考えからだ。一度学んだこと、身に付けたことを大切にしながら、更に学び続けてよりよい生き方を目指すことは素晴らしいと考える。

— 2013 年 3 月 5 日 林 明夫 記 —